

いざでん
韋駄天の記
劇作家
岡部耕大

(110)

「長崎の鐘」の初演は2008年である。もちろん、長崎市でも上演した。長崎市の田上富久市長とお会いしたのは「長崎の鐘」の劇場ではなかったか。

長身の田上市長は紺のスーツを着こなし、ほほ笑んでおられた。

田上市長は「わたしも長崎の鐘に参加したい」と控えめにおっしゃった。わたしの演劇にアドリアはない。きちんと構成して台本を書き、1カ月余の稽古をこなす。突然の飛び入りは演

劇そのものを乱すし、飛び入りの人も客に迷惑がられるだけである。そう説明すると田上市長は笑ってあっさり承諾してくれた。

頭の回転が速く、謙虚であった。わたしはたちまち田上市長のファンになった。開演前のお

の日と同じく新鮮であった。た

たずまいには風格すらあった。

舞台「長崎の鐘」のキャッチコピーは「長崎は、いまも祈ります」である。もちろん、

主人公は永井隆である。永井の

恩師が「無一物処即無尽蔵」の軸を永井へ送る。永井の直弟子

から励まされ、長崎市長の田上

富久氏からも励まされ、どんな

に心強かったことか。映画化には資金がある。映画「長崎の鐘」

は、まだ時間がかかりそうな配である。しかし、確実に動いている人は動いている。

田上市長のインタビューの言

長崎の祈りいまも

いさつも長崎と原爆を語って心打たれるものがあつた。立派に舞台上に参加していた。先日、テレビを見ていたら、やはり田上

秋月辰一郎との因縁と対決はユ

葉もそのひとつであつた。十分に、われわれにメッセージをくれたのである。永井隆役と秋月

市長はインタビューで長崎と原爆を語っていた。飾り気のない言葉のひとつひとつに本音と真実があり、そのメッセージはあ

がある。長崎県知事中村法道氏

が調達できなければ交渉には入れない。映画化には莫大なエネルギーと時間もいる。「継続は

力なり」という。「決めたら、決して諦めないこと」ともいう。日本中の若い人が、否、世界中の老若男女が映画「長崎の鐘」を見てくれる日が来れば。

「人類よ。戦争を計画してくれるな。原子爆弾というものが存在する以上、戦争は人類の自殺行為にしかならないのだ。戦争をやめてただ愛の掟に従って相互に助け合い、平和に生きてくれ」。この永井隆の言葉が、あるいは看護婦の「永井先生は薬屋に放り出された浄瑠璃人形のごと、くたくたになるまで働きよらすとよ」のリスミカルなユーモアを含んだ言葉が、映像からカタルシスをもたらす日まで、諦めずに映画化を働きかけるつもりでいる。